

# たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

## 女子高生・車座フォーラム 2020 (オンライン開催)



12月26日(土)に「女子高生・車座フォーラム2020」をオンラインにて開催しました。このフォーラムは、男女共同参画推進センターが中心となり、女子高生に京都大学での学生生活や研究者の仕事を知ってもらおうという企画です。今年で15回目の開催となり、高校生95名、保護者7名の参加がありました。

今年度はZoomでの開催となったため、大学紹介や入試説明は動画配信にして研究者の発表を省いたり、質問はメールにて事前に受け取るなど時間の短縮をするように調整しました。教員・学生と女子高生のグループワークや学生と保護者との意見交換につ



いては、例年通りに時間の変更をすることなく行いました。今村 博臣男女共同参画推進センター広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会進行のもと、はじめに、稲垣 恭子センター長、理事・副学長より開会の挨拶と京都大学についての紹介がありました。稲垣センター長は、京都大学は学生・研究者が自分の知的好奇心をのびのびと育てていく「自由の学風」の文化をもっていると述べ、「このフォーラムを有意義に楽しんでいただいて、京都大学にチャレンジされるのをお待ちしております。」と締めくくりました。

続いて、既製の留学ではなく学生の主体的に海外で学んでみよう、という意欲を後押しすることを目的として創設された京都大学の体験型海外渡航支援制度「おもしろチャレンジ」2019年度体験者、医学部の石川 真帆さんの「チェコで学んだ犬の福祉」と、大学院アジアアフリカ地域研究研究科の皆木 香渚子さんの「マングローブの森で異文化激突」の2名の動画を配信しました。



学生と保護者交流会の様子

引き続き、高校生は希望学部別のグループワークを教員と学生と共に行いました。事前に集めた質問内容をもとに活発な意見交換が行われ、非常に内容の充実したグループワークとなりました。学生は受験勉強や学生生活といった実体験を語り、研究生活や専門などについては講師が回答しました。高校生がグループワークに参加している間、保護者は京都大学学生との交流会に参加しました。保護者から学生へ学校生活や学部などについて疑問に思うことを質問し、学生が回答しました。

グループワーク終了後は全員でまとめの会を行い、足立 壯一男女共同参画推進センター支援室長の司会進行で、それぞれのグループで話し合った内容を報告し、他のグループの話し合いについて情報を共有しました。最後に入試企画課が8月のオープンキャンパス用に作成した動画を配信し、閉会しました。

今年度のアンケートや車座フォーラムの詳細な内容はHPに掲載していますのでご覧ください。

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/rooting/kurumaza/>



グループワークの様子

### 車座フォーラム参加者の声 (高校生のアンケートより) ※一部抜粋

- ・パンフレット等だけでは得られない情報を沢山お聞きすることができ、非常に有意義な時間となりました。京都大学へ進学したい、研究者になりたいという思いがさらに強まりました。今回オンライン開催になり、地方に住む私も気軽に参加出来ました。他の参加者の方も、仙台や四国など遠くからの参加が多かったように感じます。ぜひ来年コロナが収束しても、オンラインでも開催していただくと嬉しいです。
- ・京都大学について知るきっかけとなり、とても良い機会でした。教授や学生の方のお話も聞けて、学問に対する興味も湧き、勉強に対する意欲も湧きました。
- ・コロナウイルスが流行する中でやむを得ずオンライン開催になったとのことですが、私のような学生が泊まりがけで遠方の大学のイベントに参加することはとても難しいので、今回このような機会に恵まれ感謝しています。

## 令和3年度第1期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

令和3年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、15名（女性11名、男性4名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは育児又は介護のために十分な研究・実験時間が確保できない研究者に対し、研究又は実験業務（注：事務及び教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を助成するものです。募集は年2回です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

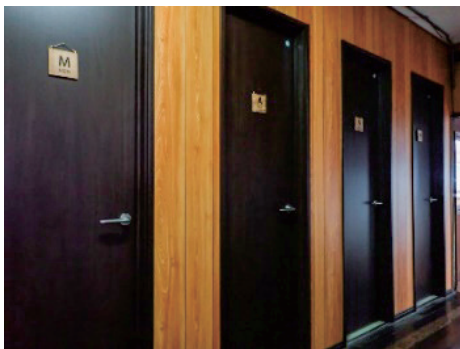
## 「ALL GENDERトイレ」新設 フィールド科学教育研究センター 芦生研究林

フィールド科学教育研究センター芦生研究林では宿泊施設の改修が行われ、誰でも使用できるAll Gender用トイレが令和2年11月17日（火）に完成しました。

芦生研究林のトイレはこれまで男女共用で運用上男女を分けていましたが、女性やトランスジェンダーの学生などはその利用で苦勞されており、個数も少なく混雑していました。今回、4つの個室に改修され、男性、女性、All Genderの3通りで運用することで、誰でも気兼ねなく使え、混雑緩和もはかれるようになりました。

林長の石原先生は、「すべてをAll Genderにすることも考えましたが、男女それぞれの専用も用意した方が使いやすく感じる人が多いのではないかと考えて、多様な設定としました。バリアフリートイレは整備されてきていますが、全国の大学演習林でジェンダーに配慮した取り組みをされている施設は聞いたことがありません。宿泊を伴う実習が多いフィールド施設では、誰でもが安心・快適に過ごし、実習に集中できるよう、トイレや風呂を改善していくことが大切と考えています。」と話されています。

また、利用者からは「半数を男女兼用トイレにすることで利用率を上げつつ、ジェンダー問題にも配慮されていて、大変満足しています。個室が2つから4つになり、全てが洋式化されたことで朝の混雑時にも比較的スムーズに利用できるようになりました。」といった声が聞かれました。



個室トイレの様子：手前から  
M(Men) A(All Gender) A(All Gender) W(Women)



ナラ材を使ったオリジナルプレート。大阪大学の考案されたAll Genderマークを許可を得て利用。

## 第2回懇話会セミナー「ハラスメント対策セミナー」

1月20日（水）12時10分より京都大学女性教員懇話会主催の「ハラスメント対策セミナー」が開催され、70名ほどの参加者がありました。講師である3名の弁護士の先生方はレジュメに沿い、多様な具体例を丁寧に解説くださいました。ハラスメントが深刻化しやすい大学ではハラスメントに対して「束」になってNOを表明することも必要であり、ハラスメントに対して正確な知識を持つことも加害者にならないためにも大切であると述べられました。大変有意義な時間となりました。

## オンライン メンター相談会

2月10日（水）12時10分よりオンラインメンター相談会を開催しました。当日は大学院生など11名の参加がありました。参加者の将来に向けての不安や、育児と仕事の両立など抱えている悩みを全員で共有しました。メンターの先生から経験談を聞き、共感した参加者同士で活発な意見交換ができる場となり、短い時間でしたが有意義な時間となりました。

男女共同参画推進センターには、女性の学生・院生・若手研究者を対象としたメンター相談制度があります。随時受け付けていますので是非ご利用ください。詳しくはHPをご覧ください。

[http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/consulting\\_rooms/mentor/](http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/consulting_rooms/mentor/)

## 2021年度保育園入園待機乳児保育室「ゆりかご」

学生・研究者の学業、研究と育児の両立を支援することを目的とし、「保育園入園待機乳児のための保育施設」（愛称ゆりかご）を設けています。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったものの、入園待ちを余儀なくされている研究者等を対象としています。2021年度は4月5日（月）から開室の予定です。

利用希望の方は、事前登録をした上で、自治体への保育園入園申請を行い、入室希望日の1か月前までにお申し込みください。

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/nursery/>



みんな どうしてる？

## 子どもが体調不良のとき

子どもはすぐに風邪をひきます。特に、母体免疫の効力が低下するおおよそ生後6か月以降、また、保育園等、集団生活の場に子どもを預けたばかりの頃などは、「熱がありますのでお迎えをお願いします」という連絡を職場で受けることが多いかもしれません。筆者の体験も交えながら子どもが体調を崩した時の対応を紹介したいと思います。

子どもの体調不良は突然です。出勤しようと思った朝、いつものように体温を測ると37.8℃、登園できない（注1）、でも今日は休めない仕事が入っている…ということは、よくあります。筆者は、そのような時、京都大学病児保育室「こもも」を利用しています（注2）。投薬や経過観察なども含め、看護師、保育士が、病児の保育を行っています。また、京都大学附属病院の小児科と兼任で、専属の小児科医の先生もいます。「こもも」以外にも、京都市には、民間の施設も含め、複数の病児保育室が開設されています（注3）。「こもも」などでは事前登録が必要で、またどの病児保育室でも風邪の流行期で満室の場合や利用できない疾患があるため、入室基準を事前に確認しておくことや、複数の病児保育室の利用可能性を検討しておくこと、必要な書類を職場や自宅に準備しておくことが大切です。多くの保護者は、日頃、朝早くから夜遅くまで子どもを保育園に預けているため、せめて子どもが体調不良の時には、子どもの傍にいてあげたい、と思うのではないかと想像されます。時間の融通が利きやすい業務に従事している場合には、このようなジレンマが一層大きくなるかもしれません。筆者もそうでした。しかし、あるとき子どもが「こもも」の魅力的なおもちゃで遊びたいために、「おねつがあるの…」とウソをついてまで行きたがったことがあり、それからは、気にせずに利用しています。少し割高にはなりますが、病児ベビーシッターを利用した体験談も周りにはあり、子どもを不慣れな場所に預けることに抵抗を感じる方の選択肢になるかもしれません。ベビーシッター育児支援割引券をうまく活用するとよいでしょう（注4）。

病児保育室や病児ベビーシッターを利用するにしろ、しないにしろ、子どもが体調不良の時は、保護者は大変です。仕事を中断し、外来受付終了間際に、子どもと小児科に駆け込むこともあれば、（場合によっては夜中の）嘔吐

や下痢の始末、機嫌の悪い子どもの相手、時には、夜間に救急外来を訪れることもあります。子どもが複数いる場合は、子ども間で感染が広がり、看護期間がさらに延びることもあります。仕事を休めば、その間に業務が溜まり、看護で消耗しているところ、休み明けの業務によって、さらに体力気力が失われることもあります。筆者の場合、そのような時には、無理をせず、平常心でいることを心がけています。イライラしそうであれば、深呼吸を、疲れたら睡眠を、家事の手抜きもしています。1歳の娘が発熱した時、ほぼ空っぽの冷蔵庫を前にして、娘には瓶詰の離乳食を、4歳の息子には、白ごはんの上に娘の離乳食と麺つゆをかけて、「まあ、いいか」と出したこともありました。

筆者は、研究と教育を主たる業務としていますが、研究に割く時間が、どうしても削られてしまいがちです。特に、子どもが小さいうちは、すぐに体調を崩すため、一層そのように感じることも多いのかもしれませんが。一方で、業績を思うように上げられないことを子どものせいにしていないか、という葛藤もあります。また、子どもがいる人は、すぐに休んで困るな、と職場で思われていないか、という不安もあります。筆者自身、子どもがおらず、会社員として勤務していた頃、育児中の同僚の業務を何度か代行した経験があり、「またか、困るな」と感じたことが少なからずあります。今となつては、同僚の状況をよく理解できていなかったことを反省しています。多くの場合、子どもは成長とともに丈夫になります。筆者も、一時的なことで、と割り切って、焦らず過ごすことを心に留め、自分に100点をあげられないこの状況や子育て自体を楽しむ気持ちでいようと心がけています。

以前であれば、祖父母等にサポートをしてもらっていた家庭も、現在のコロナ禍では、そういったサポートを受けることも難しくなっています。2021年2月現在、「こもも」も閉室になっています(注5)。保育園では、登園基準が厳しくなり、発熱等がなくても利用できない場合も少なくないと聞かれます。筆者も、コロナ禍により、子どもの体調不良で仕事を休む回数や日数は増えていますが、保護者間の協力と、職場の理解とオンライン業務の浸透によって乗り切れることも増えました。咳をしながら折り紙をする子どもの横で、マスクをしてメールを確認し、職場とは、ZOOMや電話で打ち合わせ、長時間のオンライン会議時には、子どもが初めて目にするお菓子とアニメに助けをもらい、配偶者が帰宅してからは、一切をまかせて、その間、日中にできなかった仕事をこなします。

コロナ禍が社会にもたらした課題は莫大にあり、子育てのしにくさは、その一部にすぎないかもしれません。しかし、社会全体で子どもを育む動きを後退させることなく、これまでとは別の形によるサポートの仕組みが発展していくことを切に願います。(文責 育児・介護支援事業 WG 専用アドレス: ikwg@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

- (注1) 通常の保育園では、熱が37.5度以上あると登園できず、登園中の検温で37.5度が計測されると保護者にお迎えにくるよう要請されます。
- (注2) 京都大学には、教職員・学生の子どもが、病中・病後のため幼稚園・保育園・学校へ登園・登校できない時、親が仕事や研究を休むことなく、子どもの保育ができる環境を提供する施設「こもも」があります。  
<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/sick/>
- (注3) 京都市病児・病後児保育実施施設一覧 <https://www.city.kyoto.lg.jp/hagukumi/page/0000098237.html>
- (注4) 本コラムでも既に取り上げたことのある「ベビーシッター育児支援割引券」については、以下をご参照ください。  
<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/babysitter/>
- (注5) 令和度3年度4月から「こもも」は、病中は利用できませんが、病後児保育が再開される予定です。

過去のコラムは、こちらでご覧いただけます。<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/column/mina/>

## 2020年度 ワーキンググループ活動報告

### 広報・相談・社会連携事業 WG

主査 今村 博臣

広報事業では、センターの活動について、ウェブサイトやwebニュースレター「たちばな」、研究者紹介の冊子「未来に繋がる青いリボンのエトセトラ」、卒業生紹介の冊子「Will」を通して、学内外に広報活動を行いました。

社会連携事業としては、関西の他大学と連携し、第15回女子中高生のための関西科学塾をオンラインで開催しました。京都大学においては、10月25日に様々な分野のグループに分かれて実験を実施しました。また、12月26日には女子高生・車座フォーラム2020をオンラインにて開催しました。新型コロナウイルス感染症の影響で、どちらのイベントも初めてのオンライン開催となりましたが、両イベントとも多数の高校生および保護者にご参加いただきました。将来を担う次世代の女性たちに、早い段階から京都大学の雰囲気に触れ、教員や学生と交流する機会を提供することができたと考えています。

また、初の試みとして、オンラインによるメンター相談会を開催しました。コロナ禍で研究やキャリアに関する悩みを気軽に相談する機会が減少する中で、そのような悩みの解消に繋がればと考えています。

## 育児・介護支援事業 WG

主査 斎藤 真紀

当 WG では京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。

今年度も4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後15ヶ月未満のお子さんをお預かりしています。近年京都市に認可保育所が相次いで開設されていますが、依然として年度途中での保育所入所は厳しいもようで、保育室の利用者数は年度末の時点で12名に達する予定です。

また、新たな支援の可能性を模索すべく、情報の発信と収集を促進するため、ニュースレターたちばなへのコラム掲載を継続しており、今年度は6本の記事を掲載しました。また、教職員・学生の皆さんの保活（子どもを保育園に入園させるための活動）への支援活動として、保活情報交換会を開催しました。

## 病児保育事業 WG

主査 横山 淳史

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」（以下、病児保育室）は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供（生後6ヶ月から小学校6年生※2019年4月から年齢上限引き上げ）を対象とし、急な疾病により保育園／幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ1221名、うち令和元年度の新規登録者89名（令和3年1月末現在）と毎年100名前後の新たな登録があります。定員は5名（感染隔離室1名を含む）であり、令和元年度は717名の利用がありました（令和2年3月末）。利用状況は感染症の流行に大きく左右されておりましたが、この令和2年度は、新型コロナウイルス感染の流行拡大から、院内感染予防のため、開室以来初めての長期間休室状態となりました。

また、昨年度までは京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じたの広報活動も継続して行いました。

定期的な利用者へのアンケート調査や要望を受けて、利用基準についての見直しを随時行っており、利用者からはより利用しやすくなったという声をいただいています。感染対策上困難な点もありますが、京都大学医学部附属病院感染制御部の協力のもと、京都大学教職員・学生が育児を行いつつ、仕事や学業を継続することの可能な環境を実現するため、今後も引き続きよりよい運営方法を検討する必要があると考えています。

## 就労支援事業 WG

主査 横山 美夏

本 WG の主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第1期で応募者24名、利用者12名、第2期で応募者27名、利用者21名と、時期により変動はあるものの、ここ数年応募者は増加傾向にある。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されている男女研究者も多い。必要な支援が可能になるよう制度を充実させることが喫緊の課題である。

## 教育支援事業 WG

主査 落合 恵美子

教育支援事業ワーキンググループは本年度より新たなワーキンググループとして発足しました。本学の学生を対象とした正規の授業（ILAS セミナー、全学共通科目）の提供を中心に、本学における性別（ジェンダー）と男女共同参画に関する教育に貢献することをミッションとしています。これらの授業はこれまでもセンターの提供科目として実施してきましたが、センターの事業として実施するという位置づけをより明確にしたものです。

今年度は新型コロナウイルス感染症の流行のため、オンライン授業を余儀なくされましたが、支障なく実施できました。ILAS セミナーは「売買春」をテーマにした本や論文の輪読と個人発表を行い、毎回時間いっぱいまで活発な意見交換が行われました。全学共通科目「ジェンダー論」は、オンライン化をむしろチャンスとして、遠方の講師を依頼して1990年代のジェンダー政策形成に中心的役割を果たされた方々にご講義いただく機会をもつことができました。全14回中、プライバシー・著作権等の問題の無い8回の録画を公開動画として編集し、センター HP から年度内に公開開始の予定です。どうぞご視聴ください。

## 連載：研究者になる！－第82回－

生存圏研究所・助教 田鶴 寿弥子



### ●ターニングポイントとなったカナダの自然

幼少の頃より、自然豊かな田舎でカエルや虫の鳴き声を聴きながら、空と山を毎日眺めて過ごしました。泥水や木の葉のにおいをかぐと、大好きだったおままごとのことが今でも鮮明に思い出されます。父が務めていた博物館には古い土器や遺物が並び、それを研究者が一つ一つ調べて歴史の側面が明らかになる、そんな行程が幼い自分にはとてもキラキラとした光景に映りました。自分の世界に浸るのが好きだった私ですが、小学生の時に両親が送り出してくれたカナダとアメリカへの体験留学は、自分にとって大きなターニングポイントとなりました。飛行機から見た初めての空と雄大なカナダの森林、そしてホームシックの両方に泣いたことを今でも覚えています。その頃から、自分が知らない世界を知りたい、飛び込んでいきたい、という気持ちが少しずつ芽生えてきたのかもしれない。高校時代を思い返すと、笑顔で楽しそうに物理学の実験をくりかえす恩師の姿と言葉が印象に残っています。京大を受けようかなと相談したとき、笑顔で思い切り背中を押してくれたのもその先生でした。京大へ入学後は、図書館や古本屋さんで見つけたいろんな本を読みあさりました。父の仕事の関係で実家にも膨大な書物が山積みになっていたからか、本の香りを嗅ぐと心が落ち着く、そんな大学生でした。古本屋さんで素敵な本を見つけては読みふけていたある日、古本に挟まれた古びた一枚の紙きれを見つけました。ドラマのようですが、そこには、【この本を手にした方へ】とあり、【やりたいことをやるべし】と書かれていました。分厚い本におそらく長い間挟まれていただろう、どこの誰かも知らない古の先人からのメッセージは、当時、壁にぶつかり悩んでいた私への大きなエールになりました。

### ●木を取り巻く世界に魅了されて

学部生のころ、当時の木質科学研究所（現：生存圏研究所）で、文化財の樹種を科学で調査する研究が行われていることを知り、扉をたたきました。シルクロードの遺物調査、歴史的建造物や木彫像の調査、新しい識別手法の開拓、年輪の同位体比研究など、木が教えてくれる幅広い情報に夢中になりました。なにより、顕微鏡でみる木材組織の美しさと複雑さに魅了されました。徐々に、木製文化財の樹種を科学的に調べることで、それにより日本やアジアの適所適材な用材観や歴史を解明する、という文理融合的な研究に魅了されていきました。そして今は、人々の信仰や宗教に関連しながらも、用材観へのアプローチがあまり進んでいない東アジア地域の木彫像や建造物などの文化財に注目し、データの蓄積と解析をすすめ、人間と木の関わりや日本文化ならびに東アジアにおける文化交流の歴史を紐解く研究等を行っています。日本の木彫像の用材には、大陸からの仏教や禅、陰陽道といった様々な文化が大きな影響を与えたと考えられますが、日本に比べて、近隣アジア諸国における木彫像の樹種情報についての体系的な研究は、まだ少ないのが現状です。そこで、アメリカのボストン美術館、フィラデルフィア美術館、クリーブランド美術館などと、東アジアの古い木彫像における樹種調査を行い、各国で異なる用材観について、美術史の研究者らとともに多角的に考察しています。最近、欧米の美術館に保管されていた神像の樹種調査から、国内外へ散逸してしまった神像群の発見につながる研究があり、美術史の研究者たちと大いに盛り上がっています。私の研究は、木を軸に、美術史、考古学、建築史、地球化学といった分野の研究者だけでなく、数寄屋大工、彫刻家といったプロフェッショナルな方たちともに行います。木を見て森を見ずとならないように、様々な木の専門家たちの言葉や教えをしっかり糧として、しなやかに大胆に、調和のとれた研究をすすめたと思っています。大好きな木やたくさんの人の手で守られてきた文化財と真摯に向き合い、若い世代や社会に、もっともっとおもしろいことを還元できるような研究をしたいと考えています。

### ●「母」も「好きな研究」も両方できる有難さを噛みしめて

仕事で海外に行く機会が増え、家庭や子供を持つ同じ立場の様々な国の女性研究者らとの関わりも増えました。日本に置いてきた幼い子ども達のことを毎日心配している私が言われたのは、「母親がいない間にこそ、子どもは何かを得て立派に育つよ」という言葉でした。「子どもはもちろん大切だけれど、子どもには子どもの人生があり、母親の頑張りはずっと子どもに伝わる、あなたはあなた自身の人生を尊重しなさい。だから、ほらビール飲んで！」という励ましの言葉も。女性・男性関係なく、一人の人間として、自分の人生をいかに大切に生きるか、そのような観点からの言葉が、とても強く心に響きました。やはり共働きとはいえ、今の日本の社会構造ではまだまだ女性が家事育児、特に「名もなき家事」に費やす時間は長いように思います。自己嫌悪に陥ったりすることも多々ありますが、もとより私は完璧な女性（妻）ではなかったからと自分に言い聞かせて笑ってごまかすことにしています。疲れていても研究のことを考えるとウキウキし、「お仕事ががんばってね」と書かれた手紙を子どもから貰えるとニヤニヤするほどうれしいです。「母（妻）」も「好きな研究」も両方させてもらえるという有難さを噛みしめながら、今を大切に、支えてくれる家族、双方の両親、そして職場の人々に感謝しながら、一步一步大切に研究を続けていきたいです。

Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町  
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp  
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>